

〔資料〕

## 商業高校の総合的な学習の時間の活用に関する一考察

——ケース・メソッド教育の導入——

高 木 直 人

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

筆者が、ケース・メソッド教育に出会って大学教育に導入してから、約20年間の月日が流れた。高等学校の進路ガイダンスや出前講義を実施する中で、ケース・メソッド教育は、企業や大学教育以外でも実施は可能ではないかと考えるようになった。

そのようなときに、偶然であるが、高等学校の総合的な学習の時間に外部講師によるケース・メソッド教育を利用した講演を担当する機会を得ることができた。

そこで、本稿では、高等学校の総合的な学習の時間に、ケース・メソッド教育を利用することによって、高校生の進路選択や職業人として必要なコミュニケーションやマナー等を考えるきっかけを提案することができた事例を紹介する。

キーワード：総合的な学習の時間、問題発見、問題解決、コミュニケーション

## A study on utilization of comprehensive learning time in a commercial high school

—— Introduction of case method education ——

Naohito TAKAGI

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

## 1. 緒言

ケース・メソッド教育は、事例を基に、その内容を討議する形式で進められる講義形式の授業方法であり、思考能力を養うことを目的とした実践的な教育手法である。実践力を向上させる研修手法として、現在では世界各国のビジネススクールや企業で導入されている。それは、一方的な講義では享受できない実践的な意思決定能力等を養成できると考えられからである。

現在は、高等学校の教育現場で、すでにケース・メソッド教育の導入を試みている事例はいくつか存在する<sup>1)</sup>が、今回は、筆者が実施を試みた方法の事例を紹介する。

特に今回の事例は、高等学校で外部講師による、総合的な学習の時間を利用した条件で、2016年度から2019年度の4年間をN商業高等学校で実施した内容である。

ただし、ケース・メソッド教育を総合的な学習の時間を利用し実施できる場合は、ある一定の条件が整う必要がある。それは、事前学習と事後学習が実施できるかである。さらに、講演のテーマが職場の人間関係に関する内容であるという限られた条件を満たす必要があった。その条件が整っていたのが、N商業高等学校であった。特に、講演のテーマは、高校生が卒業して就職したときに、仕事がスムーズに行えるための職場での人間関係についての話であった。

今回は、そのある程度の条件が整って実施ができた事例について紹介する。

## 2. 総合的な学習の時間を利用する意義

文部科学省は、総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること等をねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる「知識基盤社会」の時代においてますます重要な役割を果たすものであると説明している。

さらに、今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）の、「今、求められる力を高めるための学習指導<sup>2)</sup>」においては、以下の5点があげられている。

### ①探究的な学習

探究的な学習とは、図-1のような問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動である。

### ②協同的な学習

総合的な学習の時間においては、特に、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視する。それは、多様な考え方もつ他者と適切に関わり合ったり、新しい価値を創造したりするとともに、社会に参画したり貢献したりする資質や能力及び態度の育成につながるからである。

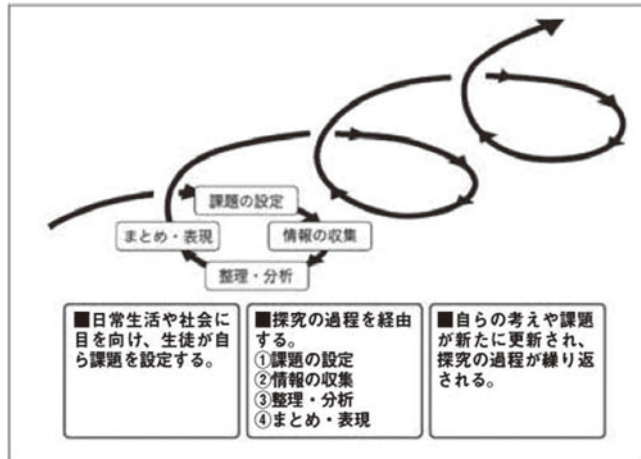


図-1 探求的な学習における高校生の学習の姿

出所：今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）P17

### ③ 体験活動の重視

総合的な学習の時間では、体験活動を適切に位置付けた横断的・総合的な学習や探究的な学習を行う必要がある。例えば、自然体験や就業体験、ボランティア活動等社会と関わる体験活動、ものづくりや生産、文化や芸術に関わる体験活動等を行うことが考えられる。

### ④ 言語活動の充実

思考力・判断力・表現力等の粋性を図る上で、体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりすることを、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けることが大切である。

言語活動を実施するにあたっては、各教科・教科等で行われている発表，討論，論述等の言語活動を充実させ、そこで培った力を探究活動において発揮させることが大切である。

### ⑤ 各教科・科目等との関連

各教科・科目等で身につけた知識や技能を総合的な学習の時間において活用することによって、身につけた知識や技能は確かになり一層生きて働くようになる。一方、総合的な学習の時間での学習活動やその成果が、各教科・科目等の学習活動への意欲を高めたり学習を促進したりする。総合的な学習の時間と各教科・科目等との関連を意識した学習活動を工夫することが大切である。

すなわち、総合的な学習の時間の改訂の趣旨を実現するためには、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習を行い、他者と協同して課題を解決する協同的な学習を実施することが重要であるとしている。

また、体験活動を重視するとともに、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の充実を

図り、各教科・目等との関連を意識した学習活動を展開すること等を踏まえ、学習指導を行うことが大切であるとしている。

今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）の、「探究的な学習における学習指導」<sup>3)</sup>では、情報の収集の実践例として、講演会やセミナーによる情報収集があげられている。高等学校が実施するためのポイントとして、「①課題意識を明らかにして講演会に臨む、②探究活動に位置付くようにし、得られた情報を事後の活動に活用する、③適切な講師を選定し、十分な打合せを行う」が、示されている。

すなわち、外部講師による講演等は、総合的な学習の時間の利用については有効な手段であると言えるが、それぞれの高等学校において上述で示したポイントがクリアできていないと本来の趣旨とは異なることになる。

今回のN商業高等学校の事例は、少なくとも、最低条件をクリアして実施できたと考えられる実践事例である。

### 3. 実践事例報告として利用できる事例とは

実践事例を紹介する場合に注意しておきたいことは、1回行った事例を、実践事例として紹介することには問題がある。少なくとも、高等学校の現場で、同じ条件で3年以上の継続できた事例を、実践事例として紹介することが筆者は望ましいと考える。

そのような考えから、2016年度から2019年度で、高等学校の現場で実践した事例を紹介する。筆者も、単発的な、出前講義や講演等は、年に数回依頼があり実施しているが、今回取り上げる事例は、そのような、単発的に依頼ではない。3年以上継続して同じ高等学校から依頼があった事例である。

### 4. N商業高等学校での実践事例

N商業高等学校では、2年次に、総合的な学習の時間としての学習内容は、「インターンシップやキッズビジネスタウンの運営等を通して、進路選択や職業人として必要なコミュニケーション、マナー等を学習します。」としている。

2016年度から2019年度の4年間、2年生を対象とした「総合的な学習の時間」を利用して、外部講師として講演を実施した。ただ、外部講師として講演を実施するだけではなく、講演前に高校生に課題を出し、その課題を学習してから講演を聞き、講演終了後には、その講演で何を学んだのかをレポートとして提出させる内容のものであった。

N商業高等学校では、2016年度から2018年度は、資料1のケースを利用し、2019年度は資料2のケースを利用し、高校生に事前学習を行ってもらった。その事前学習ができた段階で、講演を聞くという形で実施した。

実際には、第1段階として、冬休み前に課題は高校生に配布される。第2段階として、その課

題を冬休み中に取り組む。第3段階として、1月中旬に実施される総合的な学習の時間を利用した講演を聞く。第4段階として、講演を聞いた高校生は事後学習の課題に取り組み、各自がまとめを完成させ提出する。このような流れで実施されている。

当日いきなり講演を聞くのではなく、高校生が少しでも問題意識をもって講演を聞くことには、予習を行ってから授業を受けるのと同じ効果がある。講演を聞き終わった高校生には、その講演から新しい気づきと学び等の発見が少なくともあったと考えられる。高校生は、講演の後に、事後学習として、各自の考えをまとめる。この講演を聞いて各自が感じたことを素直にまとめるということは重要である。

なぜなら、同じ事例を読んでも、その事例からの感じ方はそれぞれ異なるからである。高校生は、外部講師の講演によって、同じ事例からでもいろいろな見方ができることを知り、講演後には、自分なりに気がついたことをまとめる。

では、実際にどのような工夫をして講演にケース・メソッド教育を取り入れているかを以下で紹介する。

## 5. 講演にケース・メソッド教育を取り入れる

N商業高等学校で行っている講演のテーマは、「職場や集団での人間関係問題を考える」である。このテーマからも理解できるように、職業指導の要素も取り入れる必要があることと、人間関係についても考えさせる必要がある。高校生は高等学校を卒業して就職する学生もいれば、さらに進学してから就職する高校生もいる。そのことを考えて、就職したときに必要な社会人としてのマナーも話しておかなければならない。さらには、ビジネスパーソンとして必要な能力についても話しておく必要がある。

N商業高等学校で講演を実施するにあたり重要なことは、高校2年生が対象であることと、進路選択や職業人として必要なコミュニケーション、マナー等の内容に含めながら、実際の職場で起こっている問題も考えてもらいながら講演をすることである。そのようなことを考えると、事例を利用したケース・メソッド教育を講演で利用することが高校生には関心もて、身近に感じることができるのではないかと考えた。

講演の内容は、「印象について、挨拶について、人間関係について、職場でのコミュニケーション問題について」の順番に話を行った。それは、高校生が将来就職したときに、ビジネスパーソンとして必要な能力と、本人が経験するかもしれない職場での人間関係問題に関する内容について話をしている。それは、ケース・メソッド教育を行うために必要な能力を学んでもらい新しい知識と考え方を知ってもらうためである。

また、講演後に事例をもう一度異なる角度から読むためには、ある程度の知識を知ってもらうためでもある。ある程度の知識があって事例を読む場合と、全くの知識がない状況で事例を読む場合では大きな違いがある。

最後に、ケース・メソッド教育を導入し、課題の事例について考える。特に課題で利用してい

る事例については、筆者の考える事例のねらいを解説している。それは、そこで学んだ知識や考え方を高校生に、事後学習に利用してもらうためである。

なお、本来は、ケース・メソッド教育で利用される事例には答えが存在しない。しかし、総合的な学習の時間を利用した講演であることから、筆者の考え方をあえて話している。

## 6. 高等学校で利用できるケースとは

高等学校で利用できるケースについては、大学で利用できる事例とは大きな違いが存在する。高等学校で学んだ内容を基本において作成された事例でなければいけないということである。すなわち、高校生でも理解できる事例を利用することが前提である。

そこで、N商業高等学校では、表1の課題（事例）を3回利用し、表2の課題（事例）を1回利用し講演を実施した。しかし、課題については、あくまでも高等学校の現場（先生方）が教育上必要であり、高校生にふさわしい課題を選択することが、外部講師による講演には重要な意味をもつ。そこで、採用された課題を利用することで、その講演の内容が決まるからである。ただ、単なる講演ではなく、高校生にとって実のある内容であり、総合的な学習の時間を利用するにふさわしいものでなければならない。さらには、高校生には職業人としてどのような能力が必要であるかも知ってもらう必要がある。

では、表1の課題と、表2の課題で利用している事例について、簡単な解説をしておきたい。本来は、事例に一つの答えは存在しないのであるが、今後、ケース・メソッド教育に関心を高校生に関心をもってほしいことと、問題点を発見し、その解決策を考えてほしいとのことから事例を利用した課題を作成している。

### ①表1の課題

表1の課題で使用している事例は、社員Aの行動をどう考えるかである。事前学習として、社員Aの行動を考える前に、事例に出てくる登場人物について、高校生がどのように感じるかを考えさせることから始めている。

事例を読む場合の一つのきっかけとして、登場人物について考えさせることが重要であることを知ってもらう事例でもあった。

社員Aを問題社員であると考えさせるのではなく、職場の環境から問題社員Aがなぜ生まれてきたのかを考えさせる課題である。

### ②表2の課題

表2の課題で使用している事例は、アルバイトの熱田君の行動についてどう考えるかである。事前学習として、少し難しい課題であるが、この事例を読んで問題に感じたことを書かせ、その問題をどのように解決するか解決策も考えさせている。また、店長であれば熱田君にどのような配慮を行えばよかったのかも考えさせ、熱田君と同じアルバイトとして働いていた場合にどの

表1

<p style="text-align: center;">資料</p> <p style="text-align: center;"><b>ケース 社員Aの行動をどう考えるか</b></p> <p><b>【人物】</b>                      社員A（22歳）：入社4ヶ月（自社からして別の課に異動社員）                      社員B（27歳）：入社5年～（若手）                      社員C（32歳）：入社10年～（中堅）                      社員D（37歳）：入社15年～（熟練）                      社員E（42歳）：入社20年～（経験者）</p> <p><b>【背景】</b>                      入社して来たことは、ごく普通の社員として、社員Aは働いていた。しかし、勤務して数ヶ月が過ぎた頃から、社員Aは課長社員として、課長から認められる人間になった。ある日、社員Aが出張先に行くとき自身の携帯を手袋で包み、そこで、社員Aも携帯電話を買った。すると、社員Dに「お前が売ってるのは10年使い」と一喝された。社員Dが買った携帯は、本当に10年使えという評判はなく、もう少し仕事が一入組になってからと買う意味であった。しかし、社員Aは不機嫌に言い争い出張先を帰った。また、ある日、社員Aが休憩室で休んでいた社員Cがやってきた。社員Cは、社員Aに対して「今、得意している？」と問いかけた。すると社員Aは、「是」と答えた。すると社員Cがいきなり、社員Aの携帯を盗んで、その部屋まで行った。実は社員Aは、日本企業3日目の出張先まで来て、社員Aは、「この事で決める事はできませんよ」と脅した。</p> <p>社員Aは、他にも、様々なイザコザがあり、それが続続したので、「有田とももめ」「新田直樹が怖い（悪奴り等）」「上場の子も悪奴りない」等々の悪評が広がっていった。</p> <p>この悪評から、社員Aは、「社員が悪いのは会社の責任が大きい」と「悪評を書いたことが悪評にして下りた。会社を変えます」とか「自分が一人だと困っている。誰か助けを頼りたい。また、「私は技術の経験がある。それを活かすような会社は、いくら新卒者ももらって働かなくてもいい。いつかどこになってもいい」など言い出す。その話を聞いた社員Eは、別荘と人脈を頼り社員Aに紹介。社員Aに対して、30日分の報酬の手当を支払う等々、報酬付きを出したが、社員Aは、その持ちを繰り返してごまかすのである。</p> <p>その噂から社員Aは、「私は自分が正しいので、私の意見が正しい。私は自分が正しいと思った行動をする」などと言いながら、会社をいじるのである。</p>	<p style="text-align: right;">中川商業高等学校 課題</p> <p><b>疑問</b> このケースで、社員Aのどこが悪いと思いますか、またその理由を書いてください。（250字程度）</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div> <p><b>問題</b> このケースでは、社員BからEで誰が悪いと思いますか、またその理由を書いてください。（250字程度）</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div> <p style="text-align: right;">中川商業高等学校 課題</p>
<p style="text-align: center;">事前学習</p> <p><b>理解しておく</b></p> <p>ケースの中で、「社員A（22歳）：入社4ヶ月（自社からして別の課に異動社員）」とはどんな人物でしたか？</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 30px;"></div> <p>ケースの中で、「社員B（27歳）：入社5年～（若手）」とはどんな人物でしたか？</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 30px;"></div> <p>ケースの中で、「社員C（32歳）：入社10年～（中堅）」とはどんな人物でしたか？</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 30px;"></div> <p>ケースの中で、「社員D（37歳）：入社15年～（熟練）」とはどんな人物でしたか？</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 30px;"></div> <p>ケースの中で、「社員E（42歳）：入社20年～（経験者）」とはどんな人物でしたか？</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 30px;"></div> <p style="text-align: right;">中川商業高等学校 課題</p>	<p style="text-align: center;">事後学習</p> <p>今日の読書を通して、「ケース：社員Aの行動をどう考えるか」について、どのように感じましたか、また、新しい見解はありましたか、簡単にまとめてみてください。（600字程度）</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 200px;"></div> <p style="text-align: right;">中川商業高等学校 課題</p>





ような行動をとったかも考えさせている。

事例を読む場合の一つのきっかけとして、熱田君を中心に、アルバイト先のお店について、高校生の視野で自由に考えさせる課題であった。特に、他の高校生の意見を聞き、視野を広げてほしいと考えた課題である。

表1と表2の課題は、以上の点を考えて、高校生が利用するにふさわしい事例として作成している。なお、高校生に利用できる事例は他にも数本あるが現在は高等学校の現場での利用ができていない。チャンスがあれば、さらに新しい事例を利用したいと考える。

## 7. 結言

筆者が、ケース・メソッド教育で使用するケースを作成する場合、一つの手がかりを与えようとする意図から書いている場合が多い。今回の表1と表2の事例も一つの手がかりを与える意図から作成したものである。

高等学校で、ケース・メソッド教育を実施することは、社会人としてもつべき基本的な能力を早い段階から養うための有効な方法の一つであることに間違いはない。しかし、ケース・メソッド教育を導入したから、よい教育が必ず行うことができるわけでもない。高校生が、総合学習の時間を利用してチャレンジしたい科目として、ケース・メソッドが高等学校で開講されるのであれば意味がある教育方法である。

本稿において、ケース・メソッド教育を総合的な学習の時間に組み込む場合に、どのような条件を整えば導入できたのかについて事例報告をした。その結果として、高等学校の総合的な学習に時間で導入することがふさわしいと結論を出した。

しかし、本来のケース・メソッド教育は、事例（現実に職場で起こった現象）を基に、その内容を討議する形式で進められる講義形式の授業方法である性格を考えると、冬休みに課題として事前学習に取り組みせ、事前学習で考えたことがどうであったのかを、講演に参加して本人が確かめ、そこで得た新しい気づきや知識を利用しながら、事後学習を行うという新しい授業方法も可能であると筆者は確信した。

高等学校で、ケース・メソッド教育をカリキュラムに授業科目として導入する場合は必ず、どのような高校生を育てたいのかという共通の目的が必要である。それは、教育哲学になるのかもしれないが、高等学校でケース・メソッド教育を導入して教育効果を期待するのであれば、総合的な学習の時間を利用して、「①高校生に適した事例、②ある程度考えることができる時間を与えて課題を出す、③事例をさらに理解させるための講演の実施、④講演を聴いてからの事後学習としてのまとめ」の4つがそろっていることが、最低条件であると筆者は考える。

最後に、この最低条件が満たされていない場合は、本来のケース・メソッド教育での教育効果は、高等学校の教育現場では期待できないと筆者は考える。

## 註

- 1) 香川県立高松商業高等学校教諭の松下奈央先生の「商業高校におけるケースメソッド教育導入に関する実践報告 ―ディスカッションを通し生きる力・実践力を身につける―」がある。  
宮城県仙台二華高等学校の石森広美先生の「ケースメソッドを用いたアクティブ・ラーニング型授業の構想と実践―SGH指定校における試行的実践を事例として―」がある。
- 2) 文部科学省初等中等教育局が作成した、「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）」は教育出版株式会社から平成25年7月に出版されている。  
そこには、総合的な学習の時間に係る計画の基本的な考え方や具体例、学習指導及び総合的な学習の時間を推進するための体制づくり等について、分かりやすく解説され、優れた実践事例も取り上げている。  
なお、①探究的な学習、②協同的な学習、③体験活動の重視、④言語活動の充実、⑤各教科・科目等との関連については、17頁と18頁で説明されている。
- 3) 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）の、「探究的な学習における学習指導」では、情報の収集の実践例として、講演会やセミナーによる情報収集が19頁にあげられている。

## 参考文献

- 坂井正廣編著『人間・組織・管理 ―理論とケース―』文眞堂，1979年。
- 坂井正廣編著『ケース分析の方法』文眞堂，1979年。
- 坂井正廣・村本芳郎編著『ケース・メソッドに学ぶ経営の基礎』白桃書房，1993年。
- 高木晴夫著『ケース・メソッド実践原理 ―ディスカッション・リーダーシップの本質―』ダイヤモンド社，1997年。
- 高木晴夫監修，竹内伸一著『ケースメソッド教授法入門』慶応義塾大学出版会，2010年。
- 高木直人編著『経営学へのご招待』五紘舎，2017年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その1）」『日本産業科学学会論叢』第13号 2008年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その2）」『日本産業科学学会論叢』第15号 2010年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その3）」『日本産業科学学会論叢』第19号 2014年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その4）」『日本産業科学学会論叢』第20号 2015年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その5）」『日本産業科学学会論叢』第21号 2016年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その6）」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第53巻 第2号 2016年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その7）」『名古屋学院大学研究年報』第29号 2017年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その8）」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第53巻 第4号 2017年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その9）」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第54巻 第3号 2018年。
- 高木直人著「ケース・メソッド教育（その10）」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第55巻 第4号 2019年。